

書評

鈴木敏弘著

『中世成立期の荘園と都市』

最初に、本書の構成を示す。

序章 本書の課題と構成（第一節から第五節まで省略）

第一部 荘園の成立と成立期の家司受領

第一章 荘園制の成立と荘園整理令（第一節から第五節まで省略）

第二章 摂関期における家司受領の存在形態と在地支配（第一節から第六節まで省略）

第二部 東国における荘園の成立と展開

第一章 東国御厨の成立（第一節から第六節まで省略）

第二章 東国御厨の支配（第一節から第四節まで省略）

阿部 猛

### 第三部 東国における中世都市の成立とその性格

第一章 都市の形成過程（第一節から第四節まで省略）

第二章 形成期の都市的な場（第一節から第五節まで省略）

第三章 中世都市の軍事的性格（第一節から第五節まで省略）

終章（第一節から第五節まで省略）

あとがき

事項・地名索引

以下、本書の内容を、章ごとに順次簡単に紹介したい。

序章には、本書の課題と構成が要約的に記述されている。受領の支配と荘園制の成立・荘園整理・中世都市をめぐる既往の研究を列挙して研究史をていねいにまとめ、それらに立脚して更に研究を展開しようとする意図を示す。

第一部第一章では、東大寺領美濃国大井・茜部両荘における荘園整理令の影響を考察する。国司が、整理令を背景にどのように荘園の収公を推進したのか、その結果として在地にいかなる状況が生み出され、荘園領主がどのように対応したか、総じて、国司や荘園領主にとって荘園整理令とは何であったか、とくに、荘園整理令がどのように荘園制の成立を促進する役割りを果たしたかを明らかにする。

第二章では、家司受領の存在形態を、高階業遠と藤原道長との具体的な結合の様相を明らかにし、とくに道

長によって始められた法華三十講における非時奉仕者の分析を通して検討しているが、説得的である。高階業遠の受領功過定の実態を明らかにし、撰関期の受領像を明確にし、中央による地方Ⅱ受領の支配の仕組みを確認し、受領による国内支配の在り方を東寺受領丹波国山荘を事例として考察する。受領の恣意的な行為によって荘園の存続が決定され、彼らの手により、その存在が認否され、また立荘もなされることを明らかにする。

第二部第一章では東国御厨の成立を考察する。とくに、葛西氏本貫の地である葛西地域を対象とする。東国における御厨が一二世紀から一三世紀半ばまでに成立している全体的な状況をまず把握し、ついで葛西御厨の成立について唯一の史料である永万元年三月二一日付の、いわゆる占部安光文書紛失状写（偽文書）を手懸りにして論じてきた従来の研究を批判し、伊勢大神宮神領注文や、その他の所領目録などの検討から、建久四年以降に成立し、当初の開発地が北端の猿俣の地であったことから『神風鈔』に「葛西猿俣御厨」と称されたのだろうと推理している。

第二章では、葛西御厨の伝領について、従来看過されてきた「信濃国伴野庄并下総国葛西御厨相承次第」（大徳寺文書）などを史料として明らかにした。この点は本書の功績の一つである。葛西地域は葛西清重によって伊勢神宮に寄進されて御厨となったが、本家職は皇室領であり、領家職は外宮称宜度会氏の領するところであり、実質的に葛西氏が地頭として地域支配を行っていたことを、乏しい史料を吟味することによって示している。

第三部第一章では、都市の形成過程を考察する。都市及び交通の問題は、近時最も盛んな分野の一つである。鈴木氏は、中世の「宿<sup>しゆく</sup>」成立の前提を承和二年六月二十九日付太政官符（類聚三代格・卷十六）から検討し始める。まず、東海道における交通量の増加とそれに起因して駅制が正常に機能しなくなった状況を示し、官符に

見える墨俣・草津・飽海・矢作・大井・安倍河・太日河・石瀬河・住田河の諸川の渡河点の変遷を順次検討する。そして、それを通して「宿」の成立過程及び鎌倉幕府による交通政策を明らかにする。交通量の増大に伴って律令駅制は維持できなくなり、一一世紀には崩壊に至り、その代わりとして「宿」が成立してくる。先に列記した各河の渡河点には中世的な宿が形成されてくるのである。

第二章では、形成期の都市的な場について論ずる。「吾妻鏡」に記述された源頼朝軍の渡河点として見える武蔵国隅田宿の位置についての旧来の諸説を検討した結果、隅田川東岸の隅田の地に比定するのが正しいとした。このあたり、説明はかなり錯綜しているが、旧説をていねいに採りあげ、手を尽くして解説しながら批判的な結論を導いており、好感が持てる。

第三章では、中世都市の軍事的性格について論ずる。隅田川西岸の都市的な場である石浜は隣接する今津（今戸）とともに重要な位置を占める。古利根川の川口を占め、江戸湾に出て品川・神奈河・六浦に至る経路の港湾であり、交通・流通上の要地であった。隅田宿を名字の地とする角田氏は河越氏・江戸氏の一族と考えられるが、この氏族については、旦那職売渡状などを史料としてその姿を明らかにしている。古利根川口では三角洲が形成され、その結果できたのが牛島であるが、ここには牛島氏が存在した。おそらく江戸一族の流れであろうが、これは水運上の要地であった牛島を支配していたのである。石浜氏・角田氏・牛島氏など江戸氏一族などが江戸湾最奥の古利根河口を抑えていたが、それは経済的な拠点であるとともに軍事的拠点としての要素を持ち、戦国期の城下町の成立へと、その後の展開を見通している。

以上が本書の内容の大概である。最初に記したように、本書は各章ごとに「小括」を設け、著者によってまと

めの文章が置かれ、理解しやすい。これは本書の一つの長所であろう。研究史のまとめがていねいであり、これも本書の特色の一つである。比較的史料に乏しい東国史の構築に敢えて挑戦した志を多とする。東国史について多くのことを明らかにし学問的貢献を果たしたことは疑いないが、なお望蜀の言を連ねる。

第一に、鈴木氏も断わっているが、本書の基礎になっているのは既発表の論文であり、それら諸論文を整理したことから、幾分、叙述に重複、冗長の趣きのあることは否めない。第二に、研究史の整理に手を尽くしている点は本書の長所であるが、既往の論文を列記することは必ずしも研究史の流れを整理することにはならず、論文の列挙が却って研究史的理解の妨げとなっていることも否めない。第三に、これは鈴木氏に限らず、学界の一つの傾向ともいえるが、用語の概念規定のあいまいさが気になる。「都市的な場」などというのがそれで、周知の如く、網野善彦氏は「無縁」「公界」の原理で説明する「閑渡津泊」を「都市的な場」と称した。この規定のあいまいさは、一方ではなくず的に都市と農村の区別を消滅させるとともに、他方「都市」の規定からは外れこぼれてしまう多くの歴史的事象を拾いあげる利点をももたらした。歴史の内容を豊富にするというプラス効果もあったのであり、一概に否定すべきではないとは考えるものの、やはり気になることである。第四に、「東国」の概念は時により異同があり、畿内や西国に比して史料の乏しい東国史の研究の内容を豊かにするためには、方法的な鍛錬が求められるが、「東国」全体に視野を広げていくことが必要である。尤も、こうした点は著者鈴木氏が痛切に感じておられることであろうし、将来を期しておられるものと思う。

以上はまさに望蜀の言であり、本書の価値を低めるものではない。困難な課題にとりくみ大きな成果を挙げられたことに敬意を表し、学界が一つの大きな財産を得たことをよろこび、擲筆する。

(A 5判、三〇〇ページ、東京堂出版二〇〇五年五月刊、定価七〇〇〇円＋税)